エッセイ

アンナー・ハザーレの断食

山口博一

インドの著名な歴史家でその著作が近く邦訳される予定のラーマチャンドラ・グハは、二〇一一年二月にインドのある雑誌に寄せた「インドという考えの敵」という論文で、インドとは多様性、対話、包括性などを含む考えである、それは独立当初からヒンドゥー原理主義、マオイスト、周辺諸州の分離要求の三つの敵の攻撃を受けてきた、より最近になってそれは新たに三つの敵の挑戦を受けている、格差の拡大、汚職の蔓延、環境破壊（特に鉱山業）がそれで、これはインドという考えがインド国家によって浸食されていることになるという。そこで彼は市民社会の活動に期待をかけている。

一一年八月にインドでは、ちょうどこの図式の中の汚職対市民社会の部分をそのまま現実化させたような出来事が起こった。アンナー・ハザーレが首都デリーで行った汚職反対の断食である。

彼はインド西部マハーラーシュトラ州のデカン高原の出身で今年七四歳になる。財産もない家庭に生まれ、あまり教育を受けることもなかった。軍隊で運転手として勤務したのち、故郷の村の農業や生活の改善につくすかたわら、州政府の汚職に対する抗議をたびたび行った。彼が以前からマハトマ・ガンディーに傾倒していたかどうか明らかでない。しかし筆者が一度だけ彼に会っているのは彼の生家から遠くない同じ州内の小都市で二〇〇七年に開かれた「インド・ガンディー学会」の時である。

そのアンナーが一一年四月にデリーで中央政府を相手に汚職反対の断食をした。彼にとって一二回目のものである。インドでは汚職・賄賂がごく日常茶飯のことになり、中央政府の閣僚まで次々と疑惑を持たれていたことへの抵抗であった。この時の断食は短時日で終わったが、八月には汚職に対する強力な監視法案の制定を要求して無期限の断食を宣言し、デリーの広場の一つに舞台を作って衆人環視の中に自分を横たえたのである。

筆者もこの時デリーにいたが、雨季でもあり、交通が不便な中を群衆に巻き込まれることを懸念してもっぱらテレビで観察した。毎日のように何万人もの人々が広場に集まってきた。そのほとんどが何らかの賄賂を政治家や行政当局に払わされた経験を持っていると言ってよいだろう。運動は完全に非暴力だったから、多くの人がアンナーをガンディーになぞらえ、彼の方でもガンディーが昔よく用いた「やり遂げるか死か」をスローガンに掲げた。さらに市民社会の活動家たちは汚職との関連でさまざまな社会経済的格差の問題を運動の中に持ち込んできた。

政府の譲歩があって断食は一二日で打ち切られた。汚職は立法で解決するのか。議会制民主主義が働いているところでこのような非議会的な行動はどのような意味を持つのか。個人的リーダーシップに頼りすぎた運動ではないか。あるいは自由主義的経済改革と相呼応するものではないかなど、残された疑問も多い。しかし人々がこれほど自発的に共同してある建設的な目的のために熱心になったことも独立後はじめてである。

やまぐち　ひろいち

東京大学大学院博士課程中退（社会学）
1959-91年アジア経済研究所勤務、91-2003年文教大学国際学部教授、2005年マハトマ・ガンディー国際ヒンディー大学（インド・ワルダー市）客員教授
おもな著作『地域研究論』（アジア経済研究所、1991年）、*Japan*（National Book Trust, India、2006年）